



TITLE:

# 日本庭園における自然と造形( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

田中, 正大

---

CITATION:

田中, 正大. 日本庭園における自然と造形. 京都大学, 1968, 農学博士

ISSUE DATE:

1968-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213003>

RIGHT:

氏 名	田 中 正 大
	た なか まさ ひろ
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 215 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	日 本 庭 園 に お け る 自 然 と 造 形

論文調査委員 (主 査)  
教 授 岡 崎 文 彬 教 授 三 橋 時 雄 教 授 半 田 良 一

### 論 文 内 容 の 要 旨

古代から現代にいたる世界の庭園は、自然式と人工式との二つの型に大きく分かれる。

日本庭園は各時代を通じて自然式のものとして発達してきたのであり、同じ系列のものとしては中国庭園およびイギリス風景式庭園があげられる。ただ、これらの庭園における自然観は、日本庭園のそれとはいちじるしく異なっている。この事実は幾人かの庭園史研究家によって明らかにされたが、日本庭園それ自体を内省して、時代による自然観の差異を解明したものはない。

ところが、「作庭記」にみるように平安時代の庭園は、自然の形態にヴィジョンをおいて造られたのであり、とくに「生得の山水をおもはえて」と「乞はんに従う」が寝殿造り庭園の根本理念になっていたと考えられる。この思想は、安土・桃山時代に草庵風の路地を大成した千利休において形をかえて復活したのである。いわば自然に従う型の庭園といえるであろう。

これに対して中世、とくに室町時代の代表とされる枯山水庭園は、自然を造形する典型的な庭園であり、この思想は江戸初期に利休の弟子の古田織部、さらにその弟子の小堀遠州らに、形をかえて再現されたのである。すなわち敷松葉の用い方 飛石などにおける切石を初めとした直線的手法の導入に、たんなる経時的発達としては、利休とはあまりにも明確な断層をもつ技功が認められるのである。

なお桃山時代においては、自然に従う簡素な路地庭と、豪華な書院庭園が共存したが、それは反発しつつ両者を深めるのに役ったことを見逃してはならないのである。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、いままで顧みられなかった日本庭園の自然観をほり下げて研究したものである。

日本庭園における自然観が、他国の自然式庭園のそれと全く異なることは、従来多くの研究者によってとり上げられたが、わが国の庭園自体の自然観が、時代によっていちじるしく異なる事実を明らかにしたのは著者が初めてである。

平安時代の庭園は、「作庭記」が示唆しているとおり、「自然に従う」庭であり、自然の形にヴィジョンをおいて造られた。そしてこの思想が、時代をへだてて千利休が桃山時代に大成した草庵風の路地庭において復活されたというのである。

これに対して中世、とくに室町時代を頂点とする枯山水庭は、「自然を造形する」庭園であり、これが形をかえて江戸初期の庭園に、利休の弟子の古田織部、さらに小堀遠州らによって継承されたのである。このことは利休にはみられなかった敷松葉の用い方、飛石などにおける切石を初めとした直線的手法の導入に具現されている。

なお著者は、桃山時代においては、自然に従う路地庭がある一方、桃山時代を象徴する豪華な書院式庭園も生まれているが、この両者は反発しながら、たがいにそれ自体を深めるのに役立った点を見逃してはならないと強調している。

以上で要約したように、本論文は、これまで見落とされていた日本庭園史の一側面を鋭くついたものであり、庭園史研究に新しい分野を開いたものである。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。